

『産業訓練情報』1958年8月(発行元不明)

勤労青少年教育における生活指導

矢 口 新

1

日本人の教育観は極めて一面的なのが特徴である。一般の人が教育という言葉で、頭に何を思い浮べるかを考えてみるとよい。この言葉でまず頭に浮べるのは、学校の教室で先生が生徒たちに向って話をしている場面であろう。その場面では教える者と教えられる者とがはっきり区別されていて、教えようと身構えている者と、教えてもらうのだと身構えている者とがいる。そこで行われている教育の本質は、先生が生徒に話して聞かせることである。教科書やその他の教材が両者の中間に存在しているが、それも先生の仲介によって生徒に理解させるものとして置かれてある。これは先生と生徒とが理性の道を通じて共通の理解に達するという方式である。

どこの国でもこういう教育は現在、教育活動の中心的位置を占めている。これは近代の教育の基本的な方式といってよい。近代は個人を発見したというが、それは理性をもった個人の価値を認めたということであろう。中世の社会では、人間は神とはなれた存在であった。人間は肉体をもてる存在なるが故に、神に背を向けて悪魔への道歩くものであった。それゆえ肉体は罪深きものである。人間はその罪の深さを自覚しなくてはならぬ存在である。人間的なものは否定さるべきものとして考えられなければならぬ。所が近世は人間に理性を認めた。理性は神の道へつながるものである。

そういうものを人間は本来もっていると考えるのである。この理性の道を歩くことによって人間は無限に発展する。理性こそは人間の救いの神である。ここから理性の尊重は生まれた。そうして、理性の道を通じて人間を教育することは確たる基礎を得た。近代の教育は理性の道を通じ、それを育てる教育として長い伝統をもつに至った。これは世界的な動向である。

日本の近代教育は明治以後において、その本格的な歩みをはじめた。併しこの歩みは、後進国として先進の欧米諸国がつくりあげたものを輸入するという形で進められた。近代教育の背後にあるものは、近代諸科学であり、近代的諸文化である。それは欧米では、自らの力で数百年の間に亘る営々たる努力によってつくられたものであった。自ら創造した文化であった。日本は後進国として、その結果をそっくりとり入れるという形をとった。例えば自然科学も、欧米では自らが発見した自然の原理であるが、日本では、その結論である概念的知識がまず目についた。それをおぼえるとか、身につけるとかということがまず教育の大事な仕事となった。

こうして教科書がつくられ、教師が生徒にそれを教えるということが日本の教育では最も中心的な仕事となった。教科書には、欧米で確立した知識が概念として書かれてある。それは真理である。それをおぼえさせることが教育の仕事である。日本の教育も全体としては、世界的な動向である

近代教育の理性主義の中にあるけれども、その歴史的事情から、より概念的、言語中心的、教科書中心主義的教育の形態をとっているのである。そこには真に個人の理性を発展させるという見地が薄いのである。理性の発展は、経験を整理し、それを概念化し、原理を発見するという道を通じて行われるものであるが、日本の教育は、まず言語によって教育するという中世的な言語主義の色彩が強い。これは最近の経験主義の思潮から批判されている所である。

2

所でこのような日本教育の伝統的な考え方は、あらゆる教育を支配している。教育といえはこういふ形の教育しかないもののように一般に考えられている。理性の道を通ずる教育は学校教育という形で、その具体的な姿をあらわしている。学校教育の中心をなすものは、理解を育てる教育である。所がその他の場における教育も、すべてこの学校教育の中心的な形である「教師—生徒」の関係で教育を考えるという教育観に支配されている。家庭の教育といたり、社会における教育といたりする場合も、いつも思い浮べられるのは、この教室的形態である。どこでも教える人が出て来て、教えられるものに話しかけるのである。日本人の間で考えられている家庭教育などというのは、親が教師になって子供を諭したり、説教したりすることだと思われている。つまり親が教師の代りをする事なのである。社会教育などという言葉もあるが、やはり説教する人が出て来て、身構えをして話したり聞いたりする場面が多いのである。日本では教育といえは、こういった学校の教室的教育だという考え方一色に塗りつぶされているといってもよいであろう。

しかし人間が育っていく姿をよく見詰めてみると、そういう教育以外の場でも人間の教育になっている場が多いのである。教育という言葉が教

える者と教えられる者とをどうしても思い浮べるといふのなら、そういう言葉を使わないで、人間の形成というように考えてみたらよい。人間はただ学校の教室的教育の形で形成されるのでなく、もっと様々な形で形成されているのである。ペスタロッツイの有名な言葉として、「生活は形成する」というのがあるが、それはただ学校の教室的教育のみを考えてはいけないということである。

最近生活指導という言葉が流行しているが、こういう事が言われる根本は、生活は形成するということを出発点にして青少年の教育を考えようということである。所が、日本の教育観の中にそれが入ってしまうと、生活指導もまた教室的教育の枠の中で考えられてしまう。そうするとどうなるかということ、生活指導ということ、生活に対する指導というように考えて、生活の仕方に対してあれこれお説教をすることだと考えるのである。学校の教室で国語や算数や社会、理科などを教えているだけでは、日常の生活態度を教える機会がないから、それをお説教する時間をつくらなくてはならぬと考えて、生活指導の時間を設けるといった考え方となる。生活が形成するといったことはすっかり忘れられてしまう。

道徳教育という言葉も最近流行しているが、これも同様に、お説教をする時間を設けることになろうとしている。そうしたら道徳性が育てられると考えるのである。そういうことが全然誤りだとは言えないであろうが、人間の形成され方について、それは極めて一面的な見方しかしていないといつてよいであろう。またわれわれが昔、教育された頃の修身と授業を思い浮べて見たらよい。それでどれだけ道徳性が育てられたか。全然役に立たなかったとはいわないが、極めて弱い力しかなかったといつてよいのではないか。今の大人にはある意味で昔の修身教育の欠陥が見えているのではないだろうか。生活指導というようなことが

言われて来た根本の問題から、今の教育観を改める必要があるのではないだろうか。

3

態度というものはお説教などという方式ではなかなか身につかないものである。私は毎朝バスに乗って役所に通うが、バスの中で大人達の態度を見ていると、如何にも情ないという感にうたれる。大人達にはバスに乗る時の態度もロクに身につけていないのである。大抵の人が自分の両側を半人分位ずつあけて腰を下ろしている。前に人が立っていても、平然として眼をつぶっている。女の人などはななめに腰を掛けているから、一人半分の座席を占領している。男の人は恐ろしく股をひろげて誠にゆったりと腰かけている。そこはバスの中であることを忘れていようである。いや最初からバスの中だというようなことは考えていないらしいのである。そういう神経を使うなどという態度は出来ていないようである。

そのくせ、ぼんやりしているかというとしてそうでない。ちょっとでも席がすいている電車を見ると、われ先にと飛びこんでかけ出しておしりをもって行く。奥様の二、三人づれでもあろうものなら、目の色かえてバタバタと入って来て手をひろげて腰を下ろす。「奥さんこちらよ」などと傍若無人である。そんなに腰を下ろしたがるのなら人のことも考えたらよさそうなものだが、人のことは全く考えない主義であるらしい。

東京駅の夕方のラッシュアワーなどで人々が争って電車にとびこむ時はあさましい限りである。パッと飛びこんで、お尻から先へもって行く動作の巧みなことは驚くべきものがある。私などは先へ乗っても、うしろから押しまわられてよろけている暇に席はなくなってしまふ。中には降りる時の事を考えて出口に近い席をとることまで計算している人がいる。そんなに神経を細かく使う日本人だから頭は悪くないのである。所が一た

ん腰をおろしてしまうと、もう一切頭を使わないことにしているらしい。自分の側があいていようがどうだろうがわれ聞せずである。自分が横へつめたらもう一人腰を下ろせるとか、みんながつめればあと二人は十分かけられるとかと神経を使う人はいないのである。他人のことを考えるというより、そういう公衆の中で、どう行動したらよいかなどということを考えるセンスがないのであろう。

これはただ電車に乗るということの問題でない。全体としての人間の態度の問題であり、センスの問題である。日本人は家の外へ出た時の態度、公衆としての態度というものは全く出来ていない。人がバスにならんで乗っている時、横から平気で割りこんで来る人がいる。今ならんで乗っているのだと注意をしてやると、はじめて気がつく人がいる。はじめからずるいことをしてやろうと考えている人ばかりではない。気のつかない人がいるのである。それというのも、自分が乗ることばかり考えて、人々の中でどう行動すべきかを突嗟に判断し行動する習慣がないのである。

本来如何なる行動も人々の中の行動だといって差し支えないのだが、日本人にはそういうようなセンスが出来ていないのである。或る意味で世間知らずなのである。こういうセンスは修身の話やお説教などでは身につくものではないのである。つまり理解するなどということでは出来上るのではない。日常のあらゆる行動の場面でそういう神経を使う生活をしてだんだん出来上がって来るのである。その意味では家庭の生活というか、親につれられて行動する時などがそういう行動の仕方をつくりあげる最もよい場面といえよう。道を歩く時、電車に乗る時、銭湯へ行った時、公園に行った時、食堂などへ行った時、親子づれをみていて、公衆の中での正しい振舞の仕方を子供に身につけさせようと考えていると思われる親が余りに少ないので驚かされる。そういうことは

教訓やお説教の問題ではなく、知らず知らずの中に身につく習慣であり、センスなのである。親が神経を使って行動すれば、子供もそうなるものである。親がすっかり子供にうつるのである。家庭の行動の仕方が子供のセンスをつくりあげるのである。つまり生活が形成するのである。

4

こういう生活態度としての形成を考えなければならぬことは青少年の教育の場合に多いのである。今迄はそれが殆んどお説教でなされていた。朝早く起きることはよいことだ、健康上朝早く起きなければならぬとか、夜寝る時の注意、食事の注意、運動、娯楽などの個人的な習慣も皆言葉を通じてなされていた。生活することを通じて、そういうセンスをつくることに意が注がれていないのである。まして社会的な性格をもった行動、公衆の中の行動などについては、殆んど考えられていない。このような態度といわれるようなものの教育は、言葉を通じて理解するのでなく、生活を通じて習慣として心的傾向としてつくられなければならないが、日本の家庭や社会にはそういう生活をさせるエネルギーがないのである。

日本の家庭や職場における生活態度の形成という面は、命令と禁止にはじまり、叱責、説教がこれにつづき、非難と慨嘆に終ると言われている。そのいう意味は、何々をしなさい、かにをしなさいと命令するか、何をしてはいけない、かにをしてはいけないということを禁止するか、そういう頭ごなしの命令禁止が行われる。そしてそれを守らないと、すぐ一かつを食わせる。どなりつける。それでも言うことが聞かれないと、ああどうしてこうかと青少年を非難し慨嘆し、最後には指導を放棄してしまうということを行ったものである。

こういう教育の仕方には、大事なポイントが見落されているのである。すなわち態度の形成は長

い生活の中で、環境と主体がバランスをとって住みつつける間になされるのである。この環境と主体の間にどういうバランスがとられるか、ここが態度形成を考える場合に大切な問題である。環境つまり外側から個人に対して強い力が働きかければ、個人はその力の前に圧迫される。そうして或る行動を個人はとられる。しかし外の力が個人の内なるもの、意欲、希望、興味というものを強く圧迫するなら、それは別の場面で別の形をとってあらわれる。別の場面で爆発する。例えば職場が強い圧迫を与えるなら、職場以外で個人の内なる希望は満されようとする。そうすると職場の行動はただ表面をつくろうものとなり、ただの形式を守るに過ぎないものになる。そうすれば職場で一定の形式の行動がとられていても、それは個人の全力をあげての働きではなく、むしろ面従背的なものとなる。そういう態度が形成されると、人間の共同社会の破壊の要素が大きくなるということである。

これは余談であるが、私の経験では、いわゆる職人といわれる社会の人々、大工さんとか左官屋さんとかの間では、日頃はおとなしいが酒を飲むと人ががらりとかわる、酒乱になるという人が多いようである。私は、大工さんや左官屋さんの徒弟の生活の仕方や教育などをみていて、親方や先輩に絶対服従を強いるやり方にいつも疑問をもっている。一言半句も文句をいわせないというか徒弟も若ければ若いなりに疑問をもったり、意見を持ったりするのであろうが、そういうものを引き出しながら教え導くというような態度は、先輩や親分に全然ない。こういう育てられ方をすると、われわれのような第三者が徒弟などに話をかけても彼等はやはり物をいわない。物をいうように親しくなるまで、二カ月も三カ月もつきあわなければならない。そこには警戒心というか、恐怖心というか、劣等感というか、いうにいわれぬ態度が強い。しかし一緒に食事をしたり、無駄ばなし

をしたりして、だんだん馴れて来ると次第に朗らかになる。そうしていろいろと仕事のこと、生活のこと、将来のことなどを話すようになる。そうしてそれ相応にいろいろな意見をもっていることがわかるのである。しかし絶対服従的な育てられ方をしていると、結局、大人になって、飲んだらあばれるという人間になるのではないかという感をもつのである。

このように外なるものが個人の内なるものを圧倒してしまつては、よき共同生活の態度は出来ないのである。個人が共同生活を支持し、誇りを持ち、自信をもってこうするのがよいというようなそういう社会の生活でなければならない。すなわち環境は個人個人によって積極的につくられたものという意味をもっていなくてはならぬ。それがしかも個人個人を制約するのである。これはつまり自主的自律的ということであろう。

アメリカにはウェイ・オブ・リビングという言葉がある。またドイツには「我が家の世界観」という言葉がある。アメリカやドイツの子供は、日常生活のごくありふれた事についても、これが我が家の世界観ですなどという。誇りをもっていう。それは自分がよいと信じて、自分は守っているということである。しかもそれがずっと昔からの我が家の伝統だという気持ももっている。我が国にも封建時代には家訓とか、家憲とがというものがあったが、近代生活にあった形でそういうものが出来ていないように思われる。職場にもそういうものがあまり見受けられない。言葉をつづったものはあるが、人々の心に生きているものがないのである。

以上は環境と主体がよきバランスをとっているということはどういうことを考えてみたのであるが、それは人々によって積極的に作りあげられたという意味をもっていると思う。自分たちの作りあげたものによって自分自らが抑制されるのである。人間の社会生活とは本来そうい

うものである。

5

家庭にはどういふ家庭でも一つの家風というものがある。親がそれを意識しているかいないかは別問題である。子供はその家庭の中に生まれて来て、次第にそれを身につけて行くわけであるが、その場合、親がこうきまっているからこうするのだと子供に頭ごなしに押しつけるのでは子供は自分と環境のバランスをとれないのである。親達がつくって来たものを子供と一緒に作り直しに行く、よりよいものをつくって行くということであつて、子供もまた積極的にそれを自分のものとするのである。事実、親のつくって来たものが絶対によいとは限っていないのであつて、親がそのことを認識することは大切なことである。きまりだから理屈ぬきでこの通りやれというのは、誰にとつても身が入らないのである。子供に責任を持たせないことにもなる。それでは家庭は分裂するのである。

同じようなことが、職場でもいえるのである。職場にもそれぞれ職場の風というものがある。それはもつといかめしい形で規則としてつくられている場合が多い。若い勤労青少年がそこに入って来て、その通り実行することを強制される。一応はそれでよいのであるが、それだけでは実は本当の職場という社会をつくりあげることにならない。若い人達が、それを心から支持し、よりよく改善し、本当によいものをつくろうという、そういう態度をもたなくてはならぬ。事実職場にある規則というものも改善すべきことは多いのである。経営者の立場でつくられたもので、働く人の立場をよく理解してないものもあるのである。経営者は賃金を出して労働者をやとっているから無理押しをしてもかまわないと考えていたら、いつかは社会が分裂する時が来るのである。誰もが納得するよきものをつくろうとしなくてはな

らないのである。

そういう基本的な態度を経営者がもち、職場の先輩がもち、青少年がその中へ入って皆でよりよくしようと努力するという所に環境と主体のバランスがとれるのである。青少年ももとより世間を知らない。だから先輩に教えられながら考え、実行して行くであろう。人生の経験不足ながらも、今の環境をよくしようと努力して行くであろう。そこに本当の生活の態度がつくられて行くのである。

態度というのは態度として押しつけられて形成されるのでなく、自らつくろうとして身について行くのである。しかもただ個人の内なるものを問題にしては身につかないのであって、外なる環境との関係で、それに働きかけ、またそれから働きかけられて、多くの人々が皆で協力して、つくって行くものである。そこに自信をもって、自分はこういう態度で生活するということがい得ようになるのである。

こういう態度を育てることについての根本が忘れられると、生活指導というのは問題青少年を後から迫りかけまわすような警察的仕事に陥ったりするのである。大勢の人間の中の事だから問題青少年もいないわけではない。稀にはそういうこともあることは予想されなければならぬ。しかし多くの場合は、生活を指導する、本当の生活の態度、職場の態度、仕事をする人間の態度を育てようとしなくて、形式的な処理をしていた結果から生れることが多いのである。職場自体の中に青少年を誤らせる要素が相当に多くあるのである。そういうものには目をふさいで、あるいはくさいものにふたをして、ただ形式的に青少年を扱っていても、青少年はよき態度をもつことは出来ないのである。青少年によき態度をもたせることは、資本主義の社会では職場が考えることではない、

個人個人の問題だなどというような考え方をもち、経営者がいたら、それこそ時代おくれである。

話の通じない労働組合にこりこりした経営者は多いと思う。同時に話の通じない経営者にも、社会はこりこりしている。両方が話をして通じ合うようになることは、実は人生をわたる態度についてある一定の線が出ることである。今の社会を破壊せず、人々が共に助け合い、励ましあってよりよく改善して行こうということは万人が認める所であろう。極く少数の人は今の社会を破滅しようと考えている人もいるかも知れないが、これは論外である。そういうのは問題にならないということの人々の力によってつくることが大切なのである。それは、青少年の生活態度を本当に育てるということなのである。それには大人もまたその悪い所を改める態度が必要である。経営者もそうである。そういう誰もが欠点を持ち、それを皆で改善して、本当のものをつくろうという態度をもつことが大切である。そういう本当のものが出来来ない限り、われわれの生活はよくなるらない。

そういう態度はしかしお説教で出来ることでなく、日常の茶飯事の一つ一つをそういう考え方で生きぬいて行くことによって出来るのである。生活指導の理想は高く、実践はあくまで日常的、具体的でなければならない。それだけに生活指導は、お説教的教育よりむつかしいのである。生活指導を担当する人は人生の真実の道を求める者でなくてはならない。青少年と共に真実を歩むということが、そして歩みつづけることが、青少年の立派な態度をつくるのである。体裁を飾った一片のテクニックでは生活指導は出来ない。やはり生活が形成するのである。

(国立教育研究所員)